

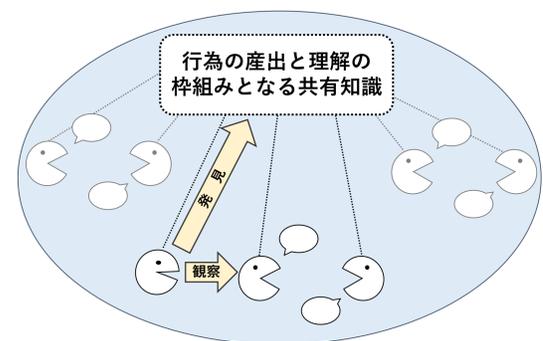
わからない相手との相互行為はいかに分析できるか： 身体知的重複障害者との“遊び”場面の相互行為分析

山本敦（早稲田大学大学院人間科学研究科）
牧野遼作（広島工業大学情報学部/早稲田大学人間総合研究センター）

方法 ・身体知的重複障害者(U)とその母親(M)およびデータ収録者(R:第二著者)との間でなされた家庭内の相互行為のビデオデータ(2時間24分間)を協働的行為の観点から分析
 ・協働的行為の分析：会話分析を基盤とし、相互行為を共有された資源の同時・連鎖的な操作として捉え、その相互文脈的構造に着目する分析^[2]

問題 ・障害によってコミュニケーションに影響を受けている人々との相互行為はいかに分析できるか？

→相互行為的手続き(=社会的に共有された行為の産出と理解の枠組み)については会話分析で明らかにされてきた^[1]
 →“非定型的相互行為”

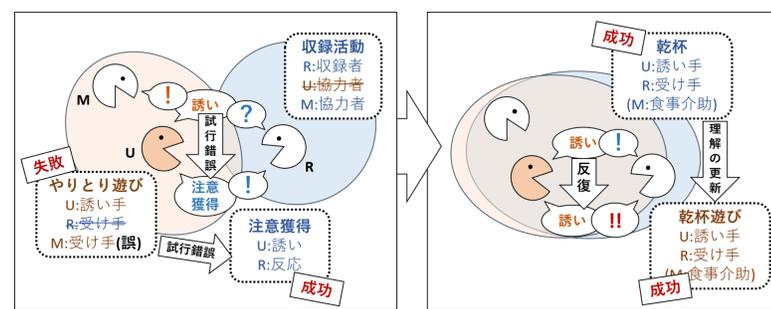


・主観を分析の道具とする場合、**対象者と分析者の同型性**が前提となるが、**会話分析の理論的前提**(上図)では、**非定型的相互行為の手続きを分析できない**(下図)
 ・しかし、先行研究には**妥当に思えるものも多い**→なぜか？
 →分析自体の過程を含め検討

分析 ・ほぼ初対面のUとRが、Uの誘いにより、2時間以上かけて“やりとり遊び”を達成する過程が観察された
 →Uの誘いが認識されない、Rの応答が遅くあきらめてしまう、Mが応答する、など
 ・Uの誘いはいかにして達成されたのか？

①分析で見いだされた“手続き”

- ・**定型的手続き**、**U-M間特有の手続き**、**U-R間特有の“手続き”**が見られた(右端表)
- ・**U-M間**：不明な手続きの発見とその帰結及びその他の活動との関係から推測
- ・**U-R間**：手続きの失敗と試行錯誤の過程及び達成から逆行的に推測

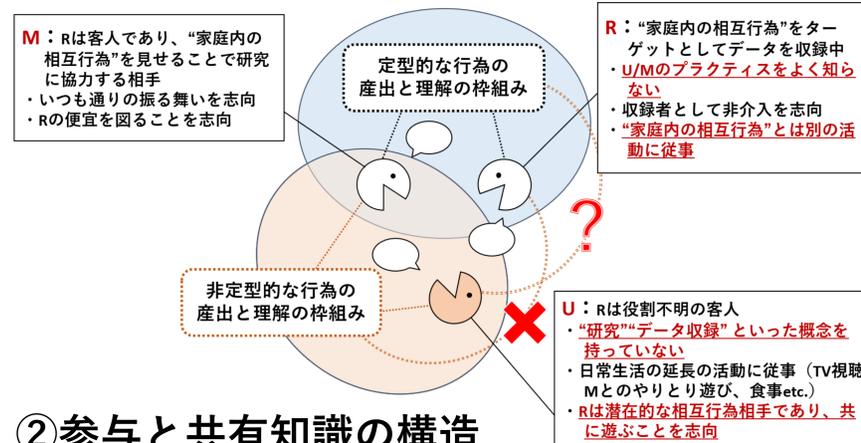


③誘い方の変化と遊びの達成の過程

- ・**U-M間特有の手続き**による誘いは**Rの非介入の志向**や**Mによる(誤)応答**によって**失敗**
- ・視線や喉や舌を鳴らすノイズを組み合わせた、Rの**注意獲得の試行錯誤**がなされる
- ・おやつの時間となりRが同席したことで、**共有文脈**を利用した遊びが可能に(右事例)

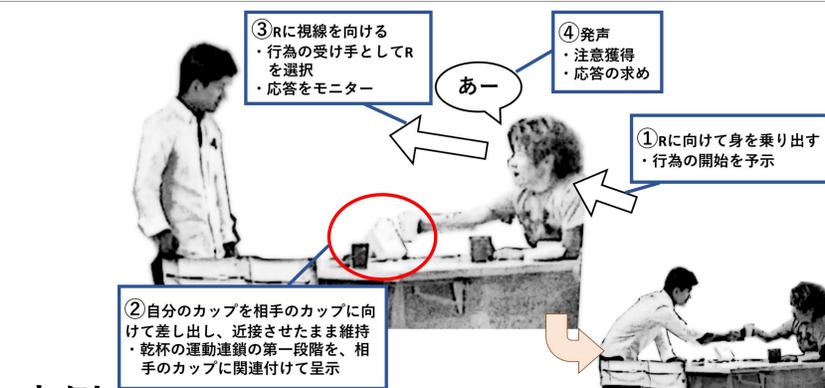
考察 ・誘いの困難はU-R間の**手続きの非共有**と、**活動への従事の理解の違い**に由来したと考えられる

- ・UはRに“通じる”**手続き**を、自らの**能力や制約の中で試行錯誤**することで発見しようとしていた
 →能力的制約：非言語的振る舞いが主、移動の困難(ノ)



②参与と共有知識の構造

- ・RはU-M間の**手続き**を知らず、Uが使える**定型的手続き**も知らない
- ・かつ収録者として**非介入的**に振る舞う
- ・UはRを**潜在的な遊び相手**とみなすが、**U-M間の遊びの開始手続き**の多くを共有していない



事例

- ・席につこうとするRに、Uが発声しつつコップを差し出し、乾杯の求めとして認識可能な振る舞いをする→Rが応じる(資源配置は上図)
 →**活動の共有**と、**活動と結びついた豊富な資源**の利用がカギになっている^[3]

■タイムライン U→Rの働きかけを抽出

時刻	働きかけ	内容	フレームイン
08:38	DVD観賞	定型の手続き(手を振るなど)とU-M間特有の手続き(手合わせなど:U手を差し出す-M手に触れる)が用いられる	
24:42	昼食-DVD観賞	定型の手続き(手を振るなど)が主に用いられる	
1:38:49	DVD観賞	U-R間特有の手続き(視線と喉や舌を鳴らす音を様々な組み合わせる)による注意獲得の試みの後、Mとのやりとり遊び(手合わせなど)がまとまってなされる	
2:24:04	DVD観賞-おやつ	U-R間特有の手続きが特定の手続き(視線を向けつつ舌を鳴らす)に収束する乾杯遊びの達成と反復	

資源的制約：周囲に共有物がない 環境的制約：発声にはMが応答
 ・**活動の変化と文脈共有**は、上述の制約を解消することで遊びを達成可能にしていた(RによるU-M固有の遊びの達成については^[4])
 ・**課題**：U-R間手続きの“共有”問題、“手続き”の適応価の問題

[1] Wilkinson, R. (2019). Atypical interaction: Conversation analysis and communicative impairments. Research on Language and Social Interaction, 52(3), 281-299. [2] Goodwin, C. (2018). Co-operative action. Cambridge University Press. [3] Goodwin, C. (2003). Pointing as situated practice. In K. Kita (ed.), Pointing: Where language, culture, and cognition meet (pp.217-241). Cambridge: Cambridge University Press. [4] 牧野遼作 (2021). 相互行為は楽し—遊戯としての相互行為分析の可能性. 木村大治・花村俊吉(編) 出会いと別れ: 「あいさつ」をめぐる相互行為論.